幼小連携の運動遊びに関する実証的研究

桝田諒子　（　横浜国立大学　）

１．目的

本研究は、幼小連携における運動遊びの意義を実証的に明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

１）対象者：表１に示す通りである。

表１　授業実践概要

授業実践Ⅰ	B 小学校 2 年 28 名 D 幼稚園 5 歳児 26 名	マットを使った運動遊び
授業実践Ⅱ		多様な動きをつくる運動遊び
授業実践Ⅲ	E 小学校 2 年 28 名 G 幼稚園 5 歳児 21 名	走・跳の運動遊び

２）調査方法：①児童アンケート（授業評価、仲間づくりの授業評価、自由記述）、②教師への半構造化インタビュー、③協議会における逐語記録、④ビデオ撮影を行った。

３）分析方法：①児童自由記述、②教師への半構造化インタビュー、③協議会の逐語記録は KH Coder-200e-f にて共起ネットワーク分析。①児童による「授業評価」（5 項目、それぞれ 5 段階評価に換算）及び「仲間づくりの評価」（5 項目）は平均点を算出。④ビデオ撮影した学びはエピソード記述分析。

３．結果と考察

4 つの分析からトライアンギュレーションを保持し、幼小連携における運動遊びの意義について考察した結果、**＜児童・園児双方に互恵性のある意義＞＜児童の意義＞＜園児の意義＞＜教師の意義＞**の 4 つに分類できた（表 2）

表 2　本研究において考察された幼小連携の意義

児童・園児双方に互恵性のある意義	⑴連携活動自体の楽しさ　⑵学習意欲の向上 ⑶技能面・内面の成長　⑷協力の表れ ⑸思考力・判断力・表現力の発揮 ⑹ペア間の関係性の構築と人間性育成のきっかけ ⑺自己肯定感の高まり　⑻運動遊びへの没頭
児童の意義	⑴お兄さん・お姉さんを演じる ⑵同学年同士の学び合い・認め合い
園児の意義	⑴児童への憧れ　⑵多様な動きの経験 ⑶自分の想いを言葉で伝えること
教師の意義	⑴子どもの成長の実感と理解の深まり ⑵教師の見方・考え方の変容

＜児童・園児双方に互恵性のある意義＞の代表例

⑴連携活動自体の楽しさ

「ようちえんじとやるといつもよりたのしかった」という記述や、児童による授業評価の「意欲・関心」項目が 2.95 点だったこと、教師インタビュー及びエピソード記述より一緒に楽しく活動する姿が見られたことから、連携活動自体の楽しさがあったと考えられる。

＜児童の意義＞の代表例

⑵同学年同士の学び合い・認め合い

児童が同学年同士の頑張りを認めている記述や、教師インタビューより同学年同士で学び合う姿が見られたこと、エピソード記述より学び合ったことの成果を最大限発揮している姿から、児童は同学年同士で学び合い、認め合えたと考えられる。

＜園児の意義＞の代表例

⑴児童への憧れ

教師インタビュー及び協議会の共起ネットワークより園児は児童に憧れ意欲を高めていたこと、エピソード記述より園児がペア児童の動きに恍惚し、運動への動機を高める姿が複数認められたことから、園児は児童に憧れの気持ちを抱いたと考えられる。

４．結論

本研究において考察された幼小連携の意義は、幼稚園教育要領や小学校学習指導要領で目指される資質・能力の育成につながると考えられる。また、「学習意欲の向上」の中で見られた粘り強く取り組む態度や、「協力の表れ」「お兄さん・お姉さんを演じる」「同学年同士の学び合い・認め合い」等の非認知能力育成に資することは、幼小連携の運動遊びを行う意義があると考えられる。さらに、園児は「多様な動きの経験」ができ、今後幼小連携を継続的に行うことで、多様な動きの獲得やさらなる身体性の拡張につながっていく可能性があると考えられる。